第146回
愛知学院大学モーニングセミナー

「今年は明治維新から150年！」
～明治維新とは一体なんだったのか～

羽賀　祥二

2018年5月8日

はじめに

〇幕末維新を描く歴史小説

司馬遼太郎『竜馬がゆく』、『燃えよ剣』など

宮尾登美子『和宮様御留』、『篤姫』

山田風太郎『警視庁草紙』、『幻燈辻馬車』など

〇安岡章太郎『流離譚』

安岡章太郎の先祖・安岡嘉助

那須信吾・大石団蔵とともに土佐藩参政・吉田東洋を暗殺

（文久2年〈1862〉4月）

〇島崎藤村『夜明け前』

藤村の父・島崎正樹の馬籠宿での幕末維新

１　尾張藩の明治維新

（１）尾張藩とは？

・「御三家」（尾張・紀伊・水戸）の筆頭

・61万9500石　　第4位（加賀、鹿児島、仙台に次ぐ）

・商品経済の発展　綿業、陶磁器、醸造業など
・交通の要衝
　東海道、中山道、美濃街道、佐屋街道、飯田街道など
・海運の発展　　内海船

・文化の蓄積　　「御文庫」（蓬左文庫）、儒学・国学、本草学

（2）尾張藩の明治維新

・教科書や概説書には登場しない

・薩長土肥との違い　　明治政府の指導者

・第14代藩主の徳川慶勝

　安政の大獄で隠居謹慎

　第15代茂徳（もちなが）

　第16代徳成（6歳、ながなり、後義宜（よしのり））

・「青松葉事件」　慶応4年1月20日　尾張藩重臣12名の処刑

・写真大名徳川慶勝

・博物学者伊藤圭介（日本最初の理学博士）

・柳川春三（洋学者、新聞雑誌の発刊）

（3）青松葉事件」「島崎藤村『夜明け前』から

「尾州とても、藩論の分裂をまぬかれたわけでは決してない。過ぐる年の冬あたりから、尾張藩の勤王家で有力なものは大抵御隠居（徳川慶勝）に従って上洛していたし、御隠居とても日夜京都に奔走して国を顧みるいとまもない。その隙すきを見て心を幕府に寄せる重臣らが幼主元千代を擁し、江戸に走り、幕軍に投じて事をあげようとするなどの風評がしきりに行なわれた。もはや躊躇すべき時でないと見た御隠居は、成瀬正肥、田宮如雲らと協議し、岩倉公の意見をもきいた上で、名古屋城に帰って、その日に**年寄渡辺新左衛門、城代格榊原勘解由、大番頭石川内蔵允**の三人を二之丸向かい屋敷に呼び寄せ、朝命をもって死を賜うということを宣告した。なお、佐幕派として知られた安井長十郎以下十一人のものを斬罪に処した。幼主元千代がそれらの首級をたずさえ、尾張藩の態度を朝野に明らかにするために上洛したのは、その年の正月もまだ早いころのことである。」

（4）尾張藩維新史研究には豊富な史料がある

・青松葉事件　　当事者の史料はない

・幕末期の尾張藩史料

〇小寺玉晁の風聞書

『東西評林』など文久2年から慶応3年まで11冊）

〇細野要斎（明倫堂の学者）

随筆（『感興漫筆』）・記録（『見聞雑劄』）

〇山田千疇の記録（『椋園時事録』など）

〇水野彦三郎の幕末維新書簡集

⇒⇒名古屋市鶴舞中央図書館

名古屋市蓬左文庫のデジタルアーカイブ

○水野正信の風聞書 『青窓紀聞』204冊

原本の画像データの公開

書籍としての刊行

名古屋市蓬左文庫　http://housa.city.nagoya.jp/archive/deta/20161115.pdf

２　外の世界を見た人たち

（1）音吉（文政2/1819～慶応3/1867）

・知多郡小野浦（美浜町）の船員

天保3年（1832）10月遠州沖で漂流

上海で商社員、イギリスの対日開国交渉の通訳

（２）加藤素毛（文政8/1825～明治12/1879）

・文政8年（1825）、飛騨国益田郡下原村の大庄屋の家に生まれる

・外国奉行所小買物用達伊勢屋の手代

・万延元年（1860）幕府遣米使節に加わり、アメリカへ、そして世界一周を実現

・水野正信による聞書　『二夜話』（文久元年/1861）
（『万延元年遣米使節史料集成』第三巻所収）

・アメリカ国内での歓迎の様子、制度・風俗・人情など
「撒独微斯(サントウイス)島見聞記」
「ワシントン略記」

〇水野正信「附言」

「ことし辛酉秋八月、加藤素毛といへる人来りて、亜墨利加使節に随従して一地球周海せし事を語る、其話虚妄なし、勝麟子の筆記と悉く符合するをもて賞すへく、はた信すへし、居る事二旬に及ひて、皇太神宮の例祭に詣んとて勢に去れり、逗留の中、大臣名家の招請虚日なきに、正信亦しは／＼これをきく、且其日記略を借り写して本文とし、其話を毎条に附す、又別に合衆国視聴録をもかり得て謄し、上下二巻とハなりぬれと、敢て私察を加へす、其話二席にして始終を一通するか故に、これをふたよかたりと名つくとしかいふ」

＊「勝麟子」＝咸臨丸艦長・勝麟太郎（海舟）

（3）伊藤圭介の仕事

・享和3年（1803）～明治34年（1901）

・シーボルトに学んだ医師・博物学者

　　尾張藩で種痘を実施

・文久2年蕃書調所（のち洋学調所）に出仕

・再来日したシーボルトとの再会（『青窓紀聞』）

・『官板バタビア新聞』の発刊

（4）柳河春三　　天保3（1832）～明治3（1870）

・最初は西村良三（辰輔）を名乗る

・伊藤圭介・上田仲敏に蘭学・砲術などを学ぶ

・「早熟の天才」（尾佐竹猛『新聞雑誌の創始者柳河春三』）

・10歳で伊藤圭介の『洋字篇』の校正、22歳で『西洋砲術便覧』出版

・新聞翻訳の活動

『日本貿易新聞』、『海外新聞』、『日本新聞』、『万国新聞』『中外新聞』

⇒⇒水野正信は『青窓紀聞』にこれらの新聞を丹念に書写

○『中外新聞』第1号（慶応4年2月24日出板）

「先年以来横浜開板のタイムス又ヘラルドと名くる新聞を訳し、又は英吉利亜墨利加法蘭西和蘭諸国の新聞をも得るたび毎に訳出し、写本にて伝へ来ると雖も、筆者の煩はしきに堪へざるを慮り、此度活字にて印行するものなり、新聞は其原本を得るに随て訳出し、其訳の先成るものより印行す、故に原本の号数に拘らず、只公布の前後を以て号数を定む、且訳文ならざるも広く世上に布知すべき程の事は取交へて記す、是れ中外の名を命ずる所以なり、新聞は多く益々善し、四方の君子希くは之を寄贈して、以て欠漏を補ひ玉ふべし、定価は一冊毎に表紙に記す、但し江戸相場なり」

（5）名古屋を離れた伊藤と柳川

「〇尾地ニ而拙老并柳川なと当春被召捕、右ハ外国へ内通之事と風聞有之由、此頃承り是ハ珍説也、定て西洋嫌之金鉄なとの作説なるへく怪しむニ不足、去冬も拙死去之由尾にて風聞有之由、渡辺君医師菅屋順庵申聞候、愚物いろいろ拙之事を苦ニいたし候事と相見申候、大脇虎之助神力丸伊豆妻良碇泊御模様にて御呼戻相成候を暗礁ニ而船破傷せしといふか如し〇拙老も暫御暇相願一先帰国之儀申立置候相済候得ハ、不日ニ拝顔万々可申上候」

（文久3年3月22日伊藤圭介書簡、『青窓紀聞』115巻）

３　文明国への道

（１）五ヶ条の誓文の精神　　明治元年（1868）3月14日

一　広く会議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
一　上下心ヲ一ニシテ盛ニ経綸ヲ行フヘシ
一　官武一途、庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ケ、人心ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス
一　旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ
一　智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ、我国未曾有ノ変革ヲ為ントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立ントス、衆亦此旨趣ニ基キ、協心努力セヨ

（2）福沢諭吉 （1835－1901） 文明の精神

・『学問のすすめ』と『文明論之概略』

・『福翁自伝』、『福翁百話』

①福沢の文明のとらえ方

“国民が自主独立してさまざまな領域で活発な活動を行い、多様な人間交際を結ぶ中で達成される。文明とは国民がそれぞれの立場で自由で多様な人間交際を結ぶことで生まれるもので、そうした関係の総体が文明社会である。“

②文明を進歩させる要素

・「知識」と「徳義」

19世紀の文明社会を発展させてきた原動力

・「智徳の運動はあたかも大風の如く、河流の如し」

・人々がその内心（「人心」）に「平均」して「知識」と「徳義」を持つこと

⇒⇒ “智徳の「平均」化”

・学問、教育こそが、あらゆる人に立身出世（立志）の道を開く

・「人心」と「立志」と「知識」

⇒⇒身分社会の解体＝「国民」の形成

③「門閥制度は親の敵でござる」（『福翁自伝』（1899年6月刊）

・天保5年（1834）生まれ

・豊前中津藩　大坂蔵屋敷勤番福沢百助の二男

・「父の身分はヤット藩主に定式の謁見が出来ると云ふのですから、足軽より数等宜しいけれども、士族中の下級」

・「父の生涯、四十五年の其間、封建制度に束縛せられて何事も出来ず、空しく不平を呑んで世を去りたるこそ遺憾なれ。又、初生児の行末を謀り、之を坊主にしても名を成さしめんとまでに決心したる其心中の苦しさ、其愛情の深き、私は毎度此事を思出し、封建の門閥制度を憤ると共に、亡父の心事を察して独り泣くことがあります。私の為めに門閥制度は親の敵で御座る。」

４「新政厚徳」
―維新への人々の願望―

（1）貧富の「平均」／土地の「平均」

・「世直し」一揆における貧富（田畑）「平均」への願望

・年貢半減令　相良総三らの赤報隊

「この形勢をみて取った有志の間には、進んで東征軍のために道をあけようとする気の速い連中もある。東山道先鋒兼鎮撫総督の先駆ととなえる百二十余人の同勢は本営に先立って、二門の大砲に、租税半減の旗を押し立て、旧暦の二月のはじめにはすでに京都方面から木曾街道を下って来た。意外にも、この一行の行動を非難する回状が、東山道総督執事から沿道諸藩の重職にあてて送られた。それには、ちかごろ堂上の滋野井殿や綾小路殿が人数を召し連れ、東国御下向のために京都を脱走せられたとのもっぱらな風評であるが、右は勅命をもってお差し向けになったものではない、全く無頼の徒が幼稚の公達を欺いて誘い出した所業と察せられると言ってある。」

（島崎藤村『夜明け前」）

（2）西郷隆盛の反乱

・1877年2月15日
　　「政府に尋問の筋あり」
・熊本城攻防戦
・田原坂の戦い
・城山での最後

（3）「新政厚徳」の錦絵

西郷隆盛幽冥上書
（1878年7月5日発行）

(3)「新政厚徳」の幟　「鹿児島の暴徒出陣の図」

「明治十年二月十三日鹿児島城西門の大手、当時広野になりたる地に、二丁四面の柵を構へ、暴徒が一万余集合し、弾薬兵器等も整ひしかば、惣軍此所に勢ぞろひして、大将西郷ハ大礼服を着し、新政厚徳の旗数十流、雪風にひるがへし、兵士ハ寒気を除かんため、柵の四方に火を焚、勇気を含んで扣へたり」

（4）流行星の珍説

「国に殺気が生ずるときには天体現象が生ずる。承平二年平将門が帝位に登らんとしたときには、天に二つの日輪が出現した。徳川が衰退したときには、毎夜ほうき星が出現した。西郷が蜂起した二月上旬から毎夜夜八時頃から、東方に一つの星が光り輝いて見えた。夜が更けるにしたがい輝きを増した。千里鏡で見たところ、大礼服を着て「新政厚徳」の旗を携えた人が見えた。人々は「西郷星」と称して拝んだ。」

〇スポットライトが当たっていない人々（「無名」の人々）をいかに歴史の中に位置づけるのか？

〇明治維新の課題　二つの「平均」化

　「知識」「徳義」の平均化

　「貧富」の平均化

⇒⇒実現できたのか？どこまで達成できたのか？